



昭和20年6月の空襲を思い出して



市岡元町
美淋 豊太郎さん

今回は、空襲を実際に体験された美淋さんに、語っていただきました。

終戦2ヶ月前の昭和20年6月1日、私ははじめて「空襲」のほんとうの恐ろしさを痛感しました。私が住んでいた千代見町4丁目(現在の弁天6丁目付近)の安治川沿いと尻無川沿い、境川運河沿い、築港地区は、同年1月と3月の空襲では無事に残っていたのですが、この日の空襲により港区は、全域に渡って焦土となってしまいました。

6月1日朝、学校に着くや否や空襲警報が発令され、急いで帰宅すると母がもう避難の準備をしていました。父は九条にある食料の配給所へ行って留守でした。急に空が真っ黒になり2階の雨戸を閉めにいくと、築港方面の空が煙に覆われているのが見えました。母にそのことを話すと、「今日は家の無い安治川の川筋に逃げよう」と言って、私の手を取り貯炭場の方へ走りました。私はてっきり自宅の庭の防空壕に入るものと思っていたので、なぜかなと思いながら後を振り返ると、電車道(市電千船線)の方に火の手が上がり、その火が渦を巻いているのが見えました。

貯炭場に着くと、もう多くの人が集まっていて、その大半が団平船に移っているところでした。直撃弾を受けないかぎり船の方が安全と思っていたようでした。私もそう思っていたのですが、母は泳げないからか「もうどこに逃げてもいっしょだから」と船には移りませんでした。約50坪のコンクリートで囲われた貯炭場は、三丁目の渡しから開昇渡しまで交互に続いていました。

どのくらい経ったのでしょうか。川の船の方から怒号や悲鳴が聞こえてきたので川側の端へ行ってみると、上流に繋がれていた船から火が上がり、それが順番に下流の船に燃え移っていました。船からアユミ(板)を渡って貯炭場に戻ろうとしている人、川に飛び降りて石垣に上がろうとしている人達で非常な混乱を呈していました。また電車道(市電千船線)の方を見ると一面火の海でした。やや高台にある私の家の周りはまだ燃えていませんでした。75歳になった今でも、

その光景が目に残っています。不思議なことに火に弱いと思われていた貯炭場はどこも火がつかず、泳ぎに自信の無かったために貯炭場に避難していた子どもや女性やお年寄りからは一人の死傷者も出ませんでした。一方、泳ぎに自信があり、船に逃れた人達からは多数の死傷者が出たようでした。見に行った人も多くいましたが、私は行きませんでした。私は今でも当時のことを話すことは好きではありません。



大阪行幸記念空中写真帖より大阪安治川口 (大阪歴史博物館蔵)
昭和4年頃、右側が港区。
昭和20年当時も両岸に船が何重にも重なって停泊していました。

私の家と隣の家は焼けずに残るのではないかと考えていたのですが、最後の最後に燃えてしまいました。そのとき、生まれて初めて涙が出たように思います。夕方に、父がやっと帰ってきました。父は、今のミナト公設市場(現在の弁天4丁目)付近まで帰ってきたのですが、そこから安治川までは火の海でどうすることもできず、トラックの下にもぐって火勢の衰えるのを待つしかなかったと話していました。家が全焼した私達は、祖父が疎開していた北野田(堺市)の借家へ行くことになりました。翌日、焼け跡の片付けに帰ったとき、自宅からぐるりと見渡すと安治川沿いは千船橋から源兵渡しまで全焼でしたが、九条新道から本田の方は無事のようなのでした。川沿いも此花側は無事で、春日出発電所の4本煙突も8本煙突も煙を吐いていました。港区側は市岡高女(港高校)、市岡中学(市岡高校)、港区役所、夕風の一岡ビルくらいしか建物は見えませんでした。

2日後、自転車で焼け跡を見て回ったのですが、港区で家が焼けずに残っていたところは、夕風橋南東の尻無川と市電通り(築港本線)の間の住宅と境川運河の両岸だけでした。築港へは、憲兵がたくさんいてこわかったので行きませんでした。

港区は一部を残し、全部灰に帰したように思えました。しかし、安治川沿いの石炭業者や運送業者は早々にバラック(仮の家)を建てて営業を再開させたり、市電も千日前線などが即開通したりと、輸送拠点としての港区の戦後復興の早さが印象に残っています。